

猪瀬浩平『ボランティアってなんだっけ?』

(2020 岩波ブックレット)

津 富 宏

(静岡県立大学)

この書は、いわゆる「ボランティア」とは何かについて述べる体裁をとりながら、著者（以降、「猪瀬さん」と書かせていただきます）が、ボランティアってこういうものだよと、猪瀬さんご自身の体験をもとに提示してくれる本である。ボランティアをしている人、ボランティアをしようかなという人、誰かにボランティアをお願いしている人、誰かにボランティアをお願いしようかなという人、どの人にとっても、自分のありようを見直さざるを得ない問いかけに満ちている。

本書のもつ、問いかける力は、本書の持つ「ことば」の力が大きい。

終章だけでも、藤原辰史さんとの対話を通じて、「困っている人たち」、「仕組みを掘り崩す」、「生態学」、「残党が賑わう」、「対抗的仕組み」、「分解者」といった言葉があり、「国家や市場の仕組みを（批判するのではなく）掘り崩す」といった表現もある。それに引き続いて、「むき出しのまま」交わるという表現があり、その先に「やさしさ」があらわれるという言葉もある。

さらに、伊豆旅行を振り返りつつ、「なくても困らない」、「自発的に」、「差し出し」、「共用した」、「人生山あり谷あり」、「呼び水になって」、「もがき続ける」、「雑多な人たちとともに生きる」、「人

情」といった言葉がある。そして、「頼りのない」（これは、音信不通であった友との話なので、「頼りのない」とも掛け合わされているのかもしれない）、「〈私〉たち」、「死んでしまった人」、「おずおずと結ぶ」、「自治（ボランティア）」という言葉がある。こうした言葉を一つ一つ自分のことばとすると、私たちは、ボランティアに一步步近づいている。

私も地元静岡で「ボランティア活動」をしてきた。この経験をもとに、思っていることを書いてみたい。

私が、仕事の間であり生活の間である静岡でやっているのは、うまく仕事につながらない若者や生活に困窮をしている人たちを働くことに向けて応援するボランティアである。この活動を始めたのは、20年前である。私は少年院の仕事を辞めて大学に転職したばかりだった。転職をしたのをいいことに、やりたいなあと思っていたことを始めたのである。

当時の私は、この活動を「余暇活動」と言っていた。公的活動ではなく、私的活動であり、「趣味」というか、自分の余暇なんだから好きなことに使っていいたいだろうという気持ちだった。他人が仕事に就くお手伝いをするのは初めてで、うまくで

きる確信はなかった。

私の気持ちが変わっていったのは、猪瀬さんが書かれているように、「他者の力」によってである。東京出身の私は、静岡には知り合いがいなかった。しかし、この活動を通じて、静岡県内にたくさんの仲間ができた。さらに、応援させてもらった若者が変わっていくことを目の当たりにして力をもらった。本書でも「見返り」の話が出てくるが、私自身、応援した結果として手に入れる「よろこび」や、仲間との（すったもんだも含めて）やりとりという「たのしみ」を原動力に「ボランティア」を続けてこられた。

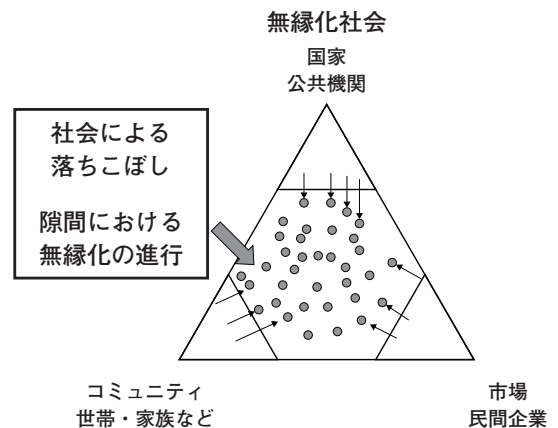
この「手ごたえ」はボランティアを始めたからこそ発見したものである。こうした手ごたえを通じて、私にとっても、就労を応援するという活動は、猪瀬さんのように、日々の暮らしの身振りになりつつあるのかもしれない。

私の「ボランティア」は、猪瀬さんのボランティアととても似ている。

まず、自発性である。猪瀬さんが自発性を説明するのに用いるのは、猪瀬さんがかかわっているNPOの伊豆旅行の話である。この伊豆旅行は、最初からきちんとした計画もなく、みんながお互いを巻き込み合いながら、お互いがボランティアとして、それぞれに役割を買って出て成立した。猪瀬さんは、この伊豆旅行について、「最初から本気でなくていい」と書いているが、本当にそうだ。私たちも就労支援について何も知らない知り合いを、ボランティアの仲間にお誘いするということをずっとやってきた。「やってみればわかります」、いや、「やってみるまでわかりません」。いずれにせよ、成り行き任せのお誘いである。「できることをできるだけでいいんです」とも言ってきた。これは猪瀬さんの「能力に応じて貢献し」と照応する。

そして、活動を長く続けているうちに、私たちは失業と就業を繰り返すことになって、お互いに応援しあうようになり、「必要に応じて与えられる」ようになってきた。そんな経験を通じて、私たちは、今、「相互扶助の社会をつくる」ことを目的にしている。活動を通じて、誰もが、無力な存在であり、助け合わなければならない存在であることを自覚し始めたからでもある。こうして、私たちは、本書でも問題視されている「支援する人とされる人という見方」を乗り越えつつある。

私たちは、下記のような図を用いて、自分たちの活動を構想している。



三角の真ん中にある「点」は、社会的な排除を受けた人たちである。私たちは、これらの「点」をつなぎなおして、ネットワークとして、相互扶助の仕組みをつくっている。猪瀬さんふうには、頼りない<私>たちがつながりなおす仕組みとして、私たち自身を構想しているということだろう。このありようは、猪瀬さんのいう「ネットワーキング」とも重なる。

ところで、私たちは、ネットワーキングにおける出会いを、南方熊楠から借りた「萃点」という概念でとらえている。鶴見和子は、萃点を次のように説明している。

さまざまな因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する地点……そこから調べていくと、ものごとの筋道は分かりやすい。……そこですべての人々が会おう出会う出会いの場、交差点みたいなもの……非常に異なるものがお互いにそこで交流することによって、あるいはぶつかることによって影響を与えあう場—それが萃点 鶴見和子(2001、p.64)

萃点を中心とする宇宙は、猪瀬さんのいう、出会いから広がっていく、出会いから変わっていく場である。

本書で気づかされたのは、私たちが行っているのは、社会的排除の領域の再組織化による「自治」の取戻しだということである。しかしながら、残党である私たちが、社会的排除の構造自体をどのように崩していくのか、その方法論は私たちには十分ではない。

ついで、無償性である。無償性についての議論は込みいっている。というのは、ボランティアは見返りを求めないという話と、ボランティアは自己満足だという話が混ざっているからだ。実際のところ、お金をもらっていたとしても(有償であったとしても)、役に立っていない活動(仕事)はいくらでもある。そんな活動(仕事)もまた、自己満足といってもおかしくない。しかし、有償の活動が自己満足であるという批判を受けることは(いわゆる、ボランティアよりも)少ない。なぜだろうか。有償の活動は相手の役に立つためではなく、自分の利益のためにやっているから「正当化できる」のではないか。つまりは、「理由が説明できる」ということだ。ボランティアの無償性が問われるのは、「理由が理解できない」からである。

さて、猪瀬さんが問うのは、本当に、ボランティアの「理由は理解できない」のだろうかということである。猪瀬さんが用意している答えは、短く言えば、それは「人情」だということであり、少し難しく言えば、「贈与」であるということである。私たちの静岡の活動も、贈与という考え方に意図的に基づいてきた。

私たちの就労支援は、交換の原理で成り立っている社会から、はみ出されてしまった<私>たちが、相互扶助という贈与の原理でつながりなおすことを出発点としてきた。つまり、資本主義の行き過ぎによって、(カール・ポランニーの言い方でいえば)社会から離床してしまった経済を、もう一度、社会に埋め戻すための仕掛けとして、私たちは私たちの活動を構想してきた。私たちは、自分たちの活動を「おせっかい」と言ってきたが、これは、猪瀬さんの言う「人情」とも重なる。私たちは、理由もなく、「おせっかい」をしたい。

「おせっかい」という言葉にも、「贈与」と同じように、「余計なお世話」(自己満足)という批判が付きまとう。しかし、それは、本書が紹介している、デヴィッド・グレーバーが「基盤的コミュニズム」(最近、出版された、ジェームズ・C・スコットの「アナキズム」も似ている)を説明するために用いている、「アルバイト中に一緒に働いている人がペンを落としているのを見たら、それを拾ってあげる」という例えと同じだ。

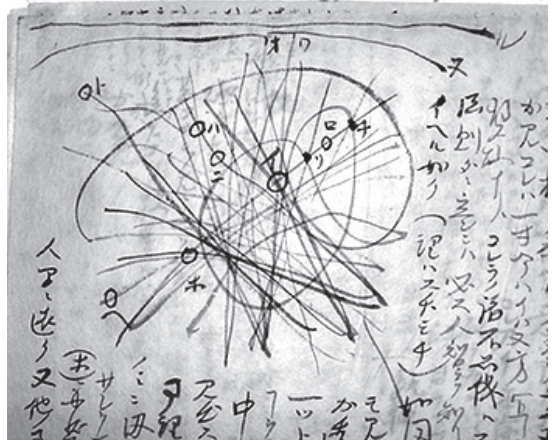
「おせっかい」のない社会はさびしい。それを「余計なお世話」という社会はもっとさびしい。そこで、私たちは、さびしくない(猪瀬さんふうにいえば、やさしい)社会をつくっている。一つ一つの声掛け、一つ一つの働きかけは、やはり「余計なお世話」かもしれない。私たちは、そういう悩みをもちながら、他者との境界線を絶えず引き直し、地を這いながら、前を向く。交換の原理(損得の原理といってもよい)が横溢するこの社会で、贈与を原理として行動するのは必ずしも容易では

ない。その一方で、人は絶えず、贈与（おせっかい）の場を求めている。私たちは、交換の場で生きることしんどさを感じ、そのような世界には何か足りないと感じているからだ。

私たちの活動が単に欠落を埋めるだけのもので終わってしまうのか、あるいは、贈与の原理が、じりじりと、交換の原理を書き換える世界の実現につながりうるのか。この問いに答えるためには、やはり、公共性についての議論がヒントになる。

そして、公共性である。ここで、猪瀬さんが正しくも指摘するのは、ボランティアが権力に動員されてきたということと、ボランティアが政治と切り離されてボランティア活動から批判的精神が抜き取られてきたことである。一方、静岡で私たちは、自分たちの活動が、単なる活動（や事業）ではなく、運動であることを発見してきた。個人の支援をいくら繰り返しても、問題は解決しない。社会、すなわち、私たちのつながり方を変えなければ、問題はなくなる。一人一人を個別に支援して働けるようになればよいというようなものではなく、私たちが安心して相互依存できる社会をつくりださなければならない。大きな言葉を使えば、私たちは、新自由主義そのものを相手として意識しなければ、悪循環の中で、いつまでも、落穂ひろいを続けざるを得ない。

この意味で、ボランティアは、自ら文脈をつくりなおす運動の担い手である。静岡で私たちは、地域の再組織化（編み直し）という言葉にたどりつき、私たち自身を、地域の組織者（オーガナイザー）として意識するようになった。オーガナイザーは、組合運動の組織者として長く使われてきた言葉であり、社会運動の方法論としてのコミュニティ・オーガナイズングという言葉も知られている。再組織化にあたり、私たちは、萃点の概念に拠ってきた。萃点は、南方熊楠の描いた南方曼荼羅（右図）の「イ」点である。



南方熊楠 土宜法竜 往復書簡（南方熊楠全集7：36）

私たちは、一人一人の困りごと（これが萃点）を基点として、社会を「編み直す」という概念を発達させてきた。そう、私たちの困りごとは、一人だけのものではなく、みんなのものである。本書で取り上げられている水俣病もそうした困りごとの一つである。人々は、水俣病を萃点として出会い、化学反応を起こし、相互の関係を編み直し、公共性を再構築した。本書では、水俣病をはじめとする公害に取り組んだ研究者である宇井純について、「宇井は普通の人びとが、直面する課題を解決するたびに自ら学び、自らを組織し、そして、地域を超えて広がっていこうとする運動に、社会を変えていく可能性を持った大きな力を感じた」と述べている。

さらに、本書は、宇井純が、自らの活動を「ボランティア活動だと思っている」と語り、ボランティアとは「義をもって助太刀いたす」ことであると語っていることを紹介している。「助太刀」とは「おせっかい」である。一方、「義」とは何なのだろうか。本書に引用されている宇井の言葉によれば、「政治をおそれず、足で歩き、泥をかぶってみつける」ことである。

猪瀬さんによれば、本当に必要なのは、「デモのような身体性を持った言葉や、絵や身振り、叫

びなどの非言語的な表現の中に、それを表現する人の想いを聴く」ことであり、「お互いの存在がむき出しのままに」交わる場である。そこから、「やさしさがあらわれる」。

この記述は、私個人の実感としてよくわかる。私の前職は少年院の教官であるが、そこで、教官のありようとして求められるのは、権力関係を抜けられないことを自覚した（だから、無自覚に権力行使をしない、あるいは、あらゆる行為に権力性が伴うことを自覚した）「裸の人間」としての真っ当さだからである。

猪瀬さんは、さらに、宇井純の「自分の住んでいる自治体をまともにする」という言葉を取りあげる。この「まとも」さこそ、宇井のいう「義」の根幹である。猪瀬さんは、宇井、そして、宇井の自主講座に集まった人びとのはたらきを、田中正造のいう「民益」を訴えて公益に取り込ませていくことであると考えているが、これが、自治体をまともにするということであろう。

私たちは、今、静岡の沼津市で、就労支援を超えて、市民運動のプラットフォームをつくり、さまざまな民益を連結させて、行政を動かしていく仕組みをつくろうとしている。まともなまちをつくらうとしているのだ。

猪瀬さんが紹介しているように、栗原彬は「民益」という言葉を敷衍して、「人間にとっても、ほかの生物にとっても、生命系が本当に安全に豊かに生きられる生命環境ということ自体がもう一つの公益だ」と言っている。つまり、民益とは、単に、国家と対抗する市民の利益ではなく、生命という生態系の利益である。

つまり、民益という語は、新自由主義が、労働（=人間）だけでなく、土地（=自然）をも商品化してきたことを問い直している。つまり、私たちの自治とは、単なる人間の世界のガバナンスではなく、生命の営みの自治なのである。

沼津市という土地は、隣接する三島市、清水町

とともに、1963年から64年にかけて、水田を守ろうとした農民を中心として、石油コンビナート建設反対闘争に勝利した土地である。人間の世界で就労支援をしてきた私たちは、生命系を守った先達に追い付きつつあるのかもしれない。

ここまで、私は自分の話を書いてきたが、本書はこうやって自分ごととして読む本だと思う。自分のふるまいについて、それは、「ボランティアなのか?」と問いかけてくれるのが、本書だからである。

ボランティアとは何か。猪瀬さんの答えは、〈自治〉である。その養分は、国家や市場を掘り崩して得られる。カール・ポランニーは、経済を社会に埋め戻すと言った。パウロ・フレイレは、被抑圧者（そして抑圧者）が人間になると言った。ボランティアは、私たちが、私たちの暮らしを手元に引き寄せる営みである。

参考文献

- 鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想』（藤原書店、2001年）
カール・ポランニー『大転換』（東洋経済新報社、2009年）
ジェームズ・C・スコット『実践 日々のアナキズム』（岩波書店、2017年）